Meconopsis aculeata Royle（ケシ科）の開花

須田泰夫

1981年から'82年にかけて種子を導入したMeconopsis属数種のうち，ヒマラヤ地方原産の1種M. aculeataが開花したので記録しておく。

'81年3月にスウェーデンのエーテボリ植物園より種子を導入し，4月11日に播種，4月30日に発芽したものが83年5月下旬から6月初旬にかけて開花した。この間，約30cmに伸びた1本の花茎におよそ10個ほどの蕾を着け，頂花から順に開花した。ひとつの花は2～3日で終った。

花は直径約4cm。花弁は薄く，倒卵形ないし倒広卵形で4枚あり，相対する2枚が他のものより大きい。淡青紫色を呈する。雄蕊は多数あり，葯は黄色で花糸は濃青紫色になる。子房にはやや密に長さ1～2mmのねた白毛がある。2枚のがく片は開花時に脱落する。また，全草に長さ1～3mmの刺毛をやや粗にもつ。

なお，植物体全体については充分な大きさにはならなかったが，これは施肥をかなり控えた結果と思われる。

今回の開花を足がかりとして，引続きMeconopsis属他種の開花も試みたい。

ハンニチバナ科植物の栽培

高山信明

ハンニチバナ科（Cistaceae）の植物は，北半球温帯地域に，8属約175種が分布しており，特に地中海沿岸地域に多く自生している。我が国にも明治時代以降に多くの種類が導入されているようであるが，植物園などの特殊な場所以外では全く栽倍されていないようである。今回この仲間の種子を，①花木としての利用②乾燥地，やせ地の緑化木としての利用③グランドカバー植物としての利用の三つを目的に導入し試作を行ったので，その結果を中間報告する。

材料　導入した植物は，本科のCistus属11種，Fumana属4種，Halimium属1種，Helianthemum属12種，Tuberaria属1種の計5属29種（変種も含む）である（表）。

播種　播種は，真砂土7に小粒の赤玉土3を混合した用土を素焼浅鉢に入れて行い，覆土は2～3mm程度とした。

発芽　播種後1～2週間の間にほぼ一斉に起り，Cistus属，Fumana属は良好で，Helianthemum属は劣っていた。Helianthemum属の種子は微細なものが多く，発芽不良の原因として播種方法が適正でなかったとも考えられる。

生長及び形状　全般的にCistus属は生長が速く低木状になるものが多く，Helianthemum属は生長がやや遅く地際付近で叢生するものが多い。C. incanusは，高さ80cm程度に生長し，分枝数多く球状となった。枝もやや太めでまっすぐ伸び節間もつまって好ましい形状となった。

C. ladanifer, C. laurifoliusは，分枝数は少いが葉が照葉で美しいのが特徴である。C. monspeliensisとC. psilosepalusは，非常に生長が速く乾燥にも強いようであるが，枝が細くてやや徒長気味であるため，木の全体的な姿はまとまりないものであった。Helianthemum alpestre, H. apeninumは，いずれも地をはうような生育を示した。

花木としての利用　これまでに開花したものは4種であるが，C. incanusの花は，直径約5cmの淡紅色で観賞価値の高いものであった。枝先に集散花序をなし，花梗を伸ばした先に花をつける。開花は一斉でなく，順次開花し割合長期間楽しめる。残念なことは，一花の開化期は